

Title	詩と注釈：デュ・バルタス『聖週間』注釈書を通してみたキリアン『黙示週』
Author(s)	林, 千宏
Citation	Gallia. 52 P.21-P.30
Issue Date	2013-03-02
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/26953
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

詩と注釈—デュ・バルタス『聖週間』注釈書を通してみた キリアン『黙示週』

林 千宏

本論で検討するのは、世界の終末を描いたミシェル・キリアンの『黙示週』(*La Dernière Semaine*, 1597)が、同時代に出版されていた詩作品あるいはその注釈書の中ではどのような位置を占めるべく構想され、またその構想が作品の構造にどのような特徴を与えているか、ということである。そもそもキリアンの『黙示週』は、デュ・バルタスの『聖週間』(*La Sepmaine*, 1578)の影響下にあって構想された作品ではあるが、『聖週間』の影響下にある、とは16世紀末にあって具体的に何を意味し、またそれは同時代の詩作品の受容を考えた時、作品の創作にどのような影響を及ぼしているのか。

ここで受容に関して注目したいのが同時代に数多く出版されていた詩の注釈という書物の形態である。なぜ詩の注釈書なのか。それはキリアン自身が自らの作品には注釈が付されるべきだと述べているからである。

Le sujet de cet œuvre estant quelque peu haut & difficile, l'Auteur s'estoit proposé d'y adjouster en marge des nottes à l'endroit de chasque point, pour plus facile intelligence d'iceux : ce que n'ayant fait toutesfois, lon a esté comme contraint, d'apposer un argument au commencement de chasque jour¹⁾.

La Dernière Semaine
«Argument du premier jour»

キリアンがこのように言う背景には、16世紀のフランスで、様々な種類の注釈書が数多く出版されていた事実がある。そこには古典文学の注釈書にとどまらず、同時代の文学の注釈書も含まれていた。まず思い浮かぶのはユマニスト、マルク＝アントワヌ・ミュレがロンサールの『恋愛詩集』(*Les Amours*, 1553)に付した注釈であろうが、キリアンが主な模範としたデュ・バルタスの『聖週間』にも、注釈書が複数出版されていたのだ。

つまり『黙示週』には注釈がつけられるべきだとする言葉には、一方で自らの作品がロンサールやデュ・バルタスらの作品と同じ高みにあるとする自負が当然ながら込められているだろう。だがもう一方でこの梗概は作品を定義するもので

1) Michel Quillien, *La Dernière Semaine ou Consommation du Monde*, Rouen, Claude Le Villain, 1597, f. viii, r^o.

もある。すなわち『黙示週』とは、本来であれば注釈が付されるべく構想され創作された、ということだ。では注釈が付されるべき詩作品とは一体どのようなものか。この問題を考えるには、キリアンの主な源泉たるデュ・バルタスの『聖週間』とその注釈書を概観する必要がある。

天地創造の一週間を歌った叙事詩『聖週間』は16世紀後半で最も大きな成功を取めた作品の一つである。広くヨーロッパで翻訳され、同時代に発表された詩作品としては非常に稀であったが、ラテン語にも翻訳されている。初版が出版されたのが1578年、その3年後1581年にはプロテスタントの神学者シモン・グラールにより注釈が付され、1585年にはカトリックのユマニスト詩人、パンタレオン・テヴナンによって注釈が付されている²⁾。

そもそも詩の翻訳が出版される、しかもそれがラテン語にも翻訳されるという事実は、『聖週間』がまさしく発表と同時に一つの古典として、さらには学術的作品として受け入れられていたことを示していよう。またラテン語以上に各国語に翻訳された、という事実も目を引く。というのも16世紀後半においては学術言語が依然としてラテン語であったことを考慮するなら、各国語の翻訳は何よりも「広く読まれること」を目的の一つとしていただろうからだ。さらに、注釈が二種類も、しかもプロテスタントとカトリックの両陣営から出版されるということは、それだけこの作品がどちらの読者にとっても魅力的かつ有用だと考えられていた証拠だろう。知の伝達がとりわけ重視されるこの時代にあって『聖週間』は万物を歌ってまさしく百科全書としての地位を占めるに至っていたのだ。

では、この作品にはどのように注釈が付されていたのか。シモン・グラールとパンタレオン・テヴナンのそれぞれの注釈書は、形態から既に大きく異なる。シモン・グラールによる注釈書は索引の形式、すなわちアルファベ順に用語が並べられ、主に難解な用語の事典のような体裁を取っている。難解な用語とは異教神話の固有名詞や動植物の説明、「魂」や「天」といった抽象概念などの説明であるが、一方で、例えば体の器官「耳」や「鼻」あるいは「腕」などについての説明まであることから、この書が『聖週間』のテキストの注釈にとどまらずある種の百科事典の役割をも果たしていることが見て取れる。この書は、のちにデュ・バルタスの『聖週間』と合本され出版されたが、当初はこの事典のみで一冊として出版されていた。

一方のパンタレオン・テヴナンによる注釈書はグラールの注釈書と形態が大きく異なり、その独自の形式と分量により我々の目を引く。デュ・バルタスの詩句そのものは、ごく短くその行数や冒頭の数語あるいは行番号がしめされるのみで、詩句に付される注釈が自由に逸脱・脱線を繰り返し、時には数ページにもわたっ

2) Cf. Guillaume Du Bartas, *La Sepmaine ou Création du monde, tome II L'Indice de Simon Goulart*, édition critique par Sophie Arnaud-Seigle, Denis Bjaï, Jean Céard, Véronique Ferrer, Sabine Lardon et Jean-Claude Ternaux, sous la direction d'Yvonne Bellenger, Paris, Classique Garnier, 2012.

La Sepmaine ou Creatin du monde, tome III Annotations de Pantaleon Thevenin, édition critique par Sophie Arnaud-Seigle, Yvonne Bellenger, Jean Céard, Véronique Ferrer, Sabine Lardon et Jean-Claude Ternaux, sous la direction de Denis Bjaï, Paris, Classiques Garnier, 2012.

て他の作家の引用が行われる。つまり、『聖週間』テキストの注釈でありながらも、この書はさらに別の書物へと読者を導く構成を備えているのだ。『聖週間』自体様々な科学的知識を網羅した一つの百科全書的作品であるが、このテヴナンによる注釈書は彼自身の博識を大幅に加えて、他の書物へとネットワークを広げるような書ともなっている。さらに、この書物には、同時代の哲学者ペトルス・ラムスの教育法が投影され、注目に値する。ラムスは論理学・弁証法 (dialectique) を独自の教育法で広めることでやはり当時のヨーロッパに大きな影響を与えたが、テヴナンの注釈書冒頭、およびそれぞれの「日」冒頭にはその「二分法」で作品を分解してみせる一種の樹形図が挿入されているのだ³⁾。ドイツへのラムスの紹介者としても知られるテヴナンはこのように、デュ・バルタスの『聖週間』をラムスの弁証法の反映された作品として読者に提示しているのである。

こうしたテキストを読解するジャンルたる注釈書の存在が注目に値するのは、それが詩人の創作にも影響を与えるからだ。創作に及ぼす影響として重要な点は次の二点を挙げられよう。第一に、注釈書が詩作品をなにより知の伝達のための書と捉えていた点。すなわち、注釈書の存在によって詩人は自らの創作物たる作品を、知の伝達のための書あるいは教育書として意識するようになる。この意識はロンサルル前世代の詩人たちとはやや異なっている。というのも、ロンサルルは自らの作品を真理の隠された書、つまり選ばれた者しかその真理に到達できない書としていたのに対し⁴⁾、知の伝達のための書とは知識をより広く提供することを目的としているからだ。さらに暗記を目的とする韻文の採用について考えるなら、もちろん16世紀においても記憶の修練は行われていたが⁵⁾、一方で同時代の注釈書や事典といった書物を用いる教育法とは一線を画すものともいえる。

そして第二に、注釈者が詩人よりも前面に出てきているという点。注釈が肥大するに従って、本来であれば注釈をつけるべきテキストを中心に据え、その周辺に語注や注釈を付けるところを、テヴナンやグラールの書物でデュ・バルタスのテキストはまとまった形ではほとんど引かれぬ。その結果、注釈とそれが付される作品の主従が逆転することになるのだ。そしてこの注釈者は一人称の「私」で庇護者に呼びかけつつテキストには語注を付し、ラムスの方法を駆使して作品を提示してみせたりもする。そのことで注釈者たる「私」が前面に現れ、さらにその教育者としての側面もが強調されるのだ⁶⁾。こうして教育者かつ注釈者という属性を持つ語り手が詩人以上にその存在を感じさせるようになる。この注釈者たる「私」が、自立した存在として注釈を付すべき作品を再構成し読者に提供する

3) Du Bartas, *La Sepmaine ou Création du monde*, tome III, pp.53-54, etc.

4) Pierre de Ronsard, «Hymne de l'Automne», v. 77-82. Cf. Pierre de Ronsard, *Œuvres complètes*, édition critique par Paul Laumonier révisée et complétée par I. Silver et R. Lebègue, STFM, Paris, M. Didier, 20 tomes, 1914-1975, tome XII, p.50.

5) Cf. Frances A. Yates, *The Art of Memory*, London, Routledge & Kegan Paul, 1966.

6) Cf. Perrine Galand-Hallyn, «La leçon d'introduction à Suétone de Nicolas Bérauld (1515): développement de l'éthos et poétique de la mémoire» in *Astour de Ramus, texte, théorie, commentaire*, études réunies par Kees Meerhoff et Jean-Claude Moisan, Québec, Nuit Blanche Éditeur, 1997, pp.235-267.

ことが、実は前世代の詩人たちが古典文学に対して行っていたことと相似関係にあることは明らかだろう。注釈者たる「私」は、作品の語り手、詩人たる「私」とも重なってくるのだ。

ここで注目したいのがデュ・バルタスの『聖週間』が発表される2年前、1576年にベネディクト会の神父で初期教父の翻訳者、さらに詩人であったジャック・ド・ビー（1535-1581）が、『我らが主の第二の到来についての六書』を発表していることだ⁷⁾。この作品はキリアンと同じく世界の終末についての詩で6部構成を取り、やはり夢に見た映像を歌うという枠組みを持つ。その意味でキリアンの模範の一つであった可能性があるが、この書の特徴は、6部構成の書の後にギリシャの教父ナジアンソスのグレゴリウスによる四行詩のフランス語韻文訳が59編付され、それぞれにビーによる注釈が付されていることだ。つまりここには既に、詩人であると同時に注釈者でもある作者そして語り手の「私」が現れてきているのである。

編者ティエリー・ヴィクトリアも指摘するように、この作品で語り手「私」は教育者あるいは教え諭す神父として的人格が前面に押し出される⁸⁾。以下の一節は「地獄」を歌う第五の書後半での語り手「私」の呼びかけである。

Toy donc qui cecy lis, pendant qu'as la puissance,
De bonne heure regarde à faire penitence.
Jette arriere le mal, prens le bien, et n'attens
A pleurer et gemir tes pechez jusque au temps,
Que ny pleurs ny regrets, ny gemir, ny te plaindre,
N'auront aucun pouvoir de tes pechez estaindre⁹⁾.

Six livres du second advenement de nostre Seigneur
livre cinquiemes, v.1095-1100

語り手「私」は人々に対して回心呼びかける。例えばロンサールも論説詩『当代の悲惨を論ず』において、新教徒たちに回心呼びかけるが、ジャック・ド・ビーはこの書物をまさしく「読んで」いるものに直接呼びかけることで、著者と読者との間に明確に教える者と教えられる者の関係を打ち立てるのだ。

こうした注釈書の存在をキリアンは明らかに意識している。しかし結局は注釈が付されないうままであった（あるいはあえて注釈を付さなかった）この作品は16世紀末、そして17世紀初頭においてどのような位置を占めることになるのか。『黙示週』全体は7部構成で、それぞれ「戦争」「疫病」「反キリスト」「最後の審判」などテーマが定められている。そのテーマを巡ってそれぞれの章では作者の博識が披露され、さながら一冊の百科事典であるかのような書物ともなっている。

7) Jacques de Billy, *Six livres du second advenement de nostre Seigneur*, édition de Thierry Victoria, Paris, Éditions Classiques Garnier, 2010.

8) *Ibid.*, pp.33-38.

9) *Ibid.*, p.330.

ではこの作品もまた古来 16 世紀に至るまで少なからず創作された百科全書詩の一つであり、作者の意図も「知の伝達」にあったのだろうか。『黙示週』では確かに、それぞれの日において詩人の広い知識が披露される。例えばそれは飢餓を歌った「三日目」では固有名詞の列挙として現れる。

De ce Nectar sucré, l'homme a chaque moment
Tire en ses maux communs un prompt médicament,
Pourveu qu'en sa douleur, prudent, il se gouverne,
Prenant ores le goust du delicat Falerne,
Le Cecube tant doux, le rude Surentin,
Le subtil Lesbien, & le gros Mamertin,
Au lieu que vous privez de ces joyeux brevages,
Ne verrez dans vos champs que des vignes sauvages¹⁰⁾.

La Dernière Semaine
«troisiesme jour», v.265-272

そして疫病を歌った「四日目」では療法が列挙される。

Le miel mesme confus avec la blanche fleur
Du laict dessus cramé, n'ostera la douleur
De la bouche ulceree, où les Meures my meures
Oinctes de miel rosat, n'osteront les blessures
De leurs chancreuses dents : Mais, bons dieux ! que feront
Nos pleurables neveux, quand viendra qu'ils seront
De chancres tous couverts, ne trouvang jà personne
Qui leur peust mettre en main du Petun de Lisbonne,
Herbe dont les effets utiles, & merveilleux,
Or' rediment nos corps des maux plus perilleux?¹¹⁾

La Dernière Semaine
«quatriesme jour», v.507-516

例えば、葡萄の産地を列挙した引用では、その列挙順がプリニウスの『博物誌』と一致しているため¹²⁾、そうした古典を源泉とした詩句であることが窺われるが、一方で療法を列挙したものは、「煙草」という 16 世紀にヨーロッパに広まった植物が挙げられていること、引用箇所的前後に現れる療法などを考慮するなら同時代の民間療法の類が参照されていると考えられよう。また『黙示週』の導入を成す「一日目」では神が世界を創造する様を同時代の兵器、大砲の製造の直喩を用

10) Quillan, *op.cit.*, p.66.

11) *Ibid.*, p.99.

12) Cf. Pline l'Ancien, *Histoire naturelle* (livre XIV), texte établi, traduit et commenté par J. André, Paris, Les Belles Lettres, 1958.

いて歌っている。以下が世界の製作の比喩として描かれる大砲の製作である。

Il fait amas d'argille, & si bien la façonne
 Que la tournant en rond, il fait comme une tonne
 Longue assez de mesure, apposant au milieu
 Un bois couvert de terre en forme de moyeu,
 Si qu'un moule appresté, l'homme ingenieux perce
 Le muy plain de metal, & tout rouge le verse
 A l'entour, de l'essieu, si qu'un beau canon fait,
 Le laisse refroidir, puis son moule desfait,
 P[o]ur plus parfaitement, la piece estant tirée
 L'adoucir d'un burin à la pointe acérée¹³⁾.

La Derniere Semaine
 «premier jour», v.371-380

印刷術の普及とともに変化したものの一つが図版の正確な複製であったことを考えるなら、この大砲製造の詩句は百科全書的というよりその作成の動的な過程を詳細に描いて、同時代に広く流通していった挿絵と対照をなす。キリアンは大砲や銃の描写を好んだようで、次のような細密な描写も作品中には見られる。

Le prudent, canonier, qui dans ses mains tenant
 Une pelle à long pied, au bec fait à gouttiere,
 Pour charger le canon de souffreuse matiere,
 Met la bourre dessus, la presse à roides coups,
 Et pour en mettre encor, met le boulet dessous :
 La piece tost chargee, il prepare l'emorche,
 Et de son boutefeu la meche arriere approche,
 Le feu tost s'y esprend, qui la trace suyvnt
 Petille, flambe, & fume, & de là plus avant
 Entre jusqu'au dedans, la poudre qui s'empouille
 Par la force du feu, le boulet avant roule,
 Qui sortant frappe l'air, & d'un tel frappement
 Estonne le venteux, & le sec element¹⁴⁾.

La Derniere Semaine
 «second jour», v.792-804

こうした銃の描写は恐らくアリオストの『狂えるオルランド』を源泉の一つとするが¹⁵⁾、キリアンの描写はより極端に微小な動きを拡大して歌うことで、図版との違いを明確に際立たせるのだ。

『黙示週』にはさらに、歴史に対する言及も含まれる。戦争を歌う「二日目」で

13) Quillian, *op.cit.*, p.12.

14) *Ibid.*, pp.50-51.

15) Cf. L'Arioste, *Roland furieux I*, traduction et notes de Michel Orcel, présentation d'Italo Calvino, Paris, Éditions du Seuil, 1984, pp.306-309 (chant IX, strophe XXVIII-XXIX), pp.394-395 (chant XI, strophe XXIV-XXV).

は、前半でネロやバラリスといった古代の王が歌われるが、その源泉はルキアノスなど専ら文献によるものだろう¹⁶⁾。しかし後半では次のような戦争への言及がみられる。

Les furieux assauts, qu'en l'isle Rhodienne
 Solyman fait livrer à la garde Chrestienne
 De valeureux soldats qui soustindrent leurs murs
 Plus d'un an, contre un ôt de trois cens mille Turcs.
 Le chaleureux combat, que la flotte navale
 Du Sultan menaçant & l'Espagne, & l'Itale,
 Recut de nos Chrestiens, faisans du sang des siens *La Dernière Semaine*
 Rougir les flots marins sur les bords Candiens :¹⁷⁾ «second jour», v.881-888

引用前半は1522年に起こったオスマン帝国スレイマン一世の軍と聖ヨハネ騎士団との攻防を、後半は1538年のプレヴェザの海戦を指す。つまり、文献からの知識に加え、ここでもほぼ同時代の世界への言及が見られるのだ。

同じ「二日目」ではキリアンは自らの創作の意図を次のように述べている。

Le desir qui me poind de faire voir au jour
 Ce tant peu de travail, qu'en un si brief sejour
 J'ay en peine conçu, ne naist d'aucune gloire
 De vouloir delaisser mon nom à la memoire,
 Ains un extremesme vueil de pouvoir profiter *La Dernière Semaine*
 A nos nepveux futurs, me semond l'enfanter,¹⁸⁾ «second jour», v.347-352

詩人は功名心のために創作するのではなく、子孫たちの「役に立つ」ためにこの書物を著しているのだとする。こうした例を見るならキリアンはまさしく当時の、広範な知識をもったユマニストの一人であり、この作品は知の伝達の書を目指していたのではないかと考えさせられる。しかし、「疫病」について歌った「四日目」で医学について歌うキリアンは自らその点において躊躇の姿勢を見せるのだ。冒頭の梗概には簡潔にこう記されている。

Au parsur il dit en passant, sur la fin de ce jour, qu'il craint d'encourir la censure des hommes entendus en la Medecine d'avoir entrepris de traiter ce subject, veu qu'il n'en avoit onc fait profession, [...] ¹⁹⁾

La Dernière Semaine

16) Quillian, *op.cit.*, p.32, v.181-188.

17) *Ibid.*, p.53.

18) *Ibid.*, p.37.

19) *Ibid.*, p.83.

«argument du quatriemes jour»

作者は医学については精通していないことを告白する。ここにはある種の常套句としての文学的な謙譲の身振りが含まれているにしても、その知識の有用性を一方では主張しつつ、一方では躊躇しているのだ。これは何を意味するのか。

ここで参照したいのが、同時代のデュ・ペロンに代表される考えである²⁰⁾。彼はキリアンが『黙示週』冒頭で詩を捧げ、アンリ4世への自らの作品の紹介を願う相手だが²¹⁾、キリアンの模範たるデュ・バルタスを批判していた。研究者ジャン・ミエルノフスキが指摘するように、この批判にはロンサールの『フランシヤッド』序文の影響が色濃く表れている。ロンサール曰く詩人とは観念上の真実を求めるべきなのであり、それは現実をそのまま再現することではない。ロンサールは『フランシヤッド』序文で次のように主張する。

Or, imitant ces deux lumieres de Poësie, fondé & appuyé sur nos vieilles Annales, j'ay basti ma *Franciade*, sans me soucier si cela est vray ou non, [...]²²⁾

«Préface sur la *Franciade*, touchant le Poëme Heroïque»

ロンサールは「歴史」に基づきつつも、自らの詩句が事実に基づくか否かは気にしない。現実をそのままに述べるのは「歴史」なのであり、いわば現実の背後にある真理を表現するのが「詩」だからだ。デュ・ペロンはこうした詩学に基づき、百科全書の知識を駆使して天地創造を描いた『聖週間』を「詩」ではなく「歴史」としたのである²³⁾。だが、ここで確認しておかなくてはならないのは、デュ・ペロンがこのように断じた広範な知識をデュ・バルタスは当然ながら「詩」と考えていたし、読者にはそれをむしろ詩的装飾と受け取るものがあったことだ²⁴⁾。というもデュ・バルタスにとって天地創造を歌い、この多様性に富んだ豊かな世界を歌うことの目的は、ひとえにそれを創造した神の御業を讃えることにあったのだが、同時にあまりに豊かな知識の披露は本来の目的から逸脱しているともとられたからである。実際にキリアンは『黙示週』「一日目」の梗概で「デュ・バルタス殿が幾つかの箇所て天地創造の最初の一週間を詩的創作で粉飾するという過

20) Cf. Du Perron, *Perroniana et Thuana ou Pensées Judicieuses, et bons mots rencontres agreables et observations curieuses du Cardinal du Perron et de M. le president de Thou...*, Cologne, 1694, pp.37-38. フランス国立図書館はこの書籍の初版(1667年出版)を所有しているが、本稿執筆時には直接この書籍を参照することができなかったため、Jan Miernowski, *Dialectique et connaissance dans La Sepmaine de Du Bartas, «discours sur discours infiniment divers»*, Genève, Droz, 1992, p.83. に引用されているものを参照した。

21) Quillien, *op.cit.*, f.iv, v°.

22) Pierre de Ronsard, *op.cit.*, t.XVI, p.340.

23) Miernowski, *op.cit.*, pp.83-84.

24) Cf. Bruro Braunrot, «La poétisation de la matière encyclopédique dans les *Sepmaines* de du Bartas» in *Du Bartas, poète encyclopédique du XVI^e siècle, Colloque international, faculté des lettres et sciences humaines de Pau et des pays de l'Adour, 7, 8 et 9 mars 1986*, actes rassemblés et publiés par James Dauphiné, Lyon, La Manufacture, 1988, pp.77-91.

ちによって陥った非難」²⁵⁾に言及しているが、「詩的創作で粉飾する」ことには聖書の展開に大きく書き加えられたデュ・バルタスの百科全書的知識が含まれることは明らかだ。つまりデュ・ペロンに近い位置にあると考えられるにもかかわらず、キリアンにはデュ・バルタスの知識を詩的装飾と考えるかのような証言が見られるのだ。ここに至って『聖週間』の百科全書の側面についてのデュ・ペロン、デュ・バルタスとキリアンの詩学の相違が垣間見られよう。そしてそれは、三者が何に対して「詩」を見出していたかの相違でもあるのだ。こうして、「詩」と「歴史」との境界が詩人によって揺らいでいることを確認し、先ほど挙げた二点目、注釈者としての「私」と詩人としての「私」の混交について考えるなら何が言えるだろうか。

最初に見たように、キリアンはその「一日目」の梗概において、本来であれば注釈をつけるべきところそれがかなわなかった旨を述べ、その代わりに梗概をそれぞれの「日」の冒頭に挿入していく。その梗概では詩人は一貫して三人称で自らを呼び、それぞれの「日」の容易な理解を助けるためというよりも、先にもみたように制作の際の自らの意図や経緯、弁解を述べているのだ。このように「注釈者」を介入させることはある意味で、自らの作品の読書法をあらかじめ定義することに他ならない。それはつまり自らの書が信仰の書であることに加えて、知の伝達のための書でもあるとしているのだ。

作者であると同時に注釈者でもあるという、自らをいわば複数の立場に置く設定は、キリアンの特徴ともいえるだろう。実際に「一日目」の詩句を読み始めると、彼は「夢を見る」という設定において、自らを靈感を受けた詩人に近づけるが、その夢の中では白髪の老人に導かれて映像を見せられる。

C'est tout, me dist icy mon Prophete chenu,
 Nous sommes à ce coup au dernier champ venu,
 Mais il te reste encor d'avoir l'intelligence
 De tous ces hauts objets, donc preste moy silence,
 Et rebrossons chemin, afin que du premier,
 Jusques à cestuy cy qui est tout le dernier,
 Je discoure amplement, & te face comprendre,
 Ce que de tant d'objets ton esprit peut apprendre.

Ce dit, il me fit voir pour la seconde fois,
 Ces sept champs separez ou n'agueres j'estois,
 Discourant hautement dessus l'intelligence,
 De chaque de ces lieux, & dont la souvenance,
 M'induit à rediger maintenant par escrit, *La Derniere Semaine*
 Ce que par ses propos, ce bon vieillard m'aprit²⁶⁾. «premier jour», v.755-768

25) Quillian, *op.cit.*, f.viii, v^o. «[...] le blasme ou est tombé le Sieur du Bartas à l'endroit de plusieurs, Par faute d'avoir coloré sa premiere semaine de quelque fiction poetique.»

26) Quillian, *op.cit.*, pp.23-24.

この詩句が示しているのは自らが白髪の人によって「教えられる者」でもあるのだ、ということである。これはもちろん、源泉である『ヨハネの黙示録』を意識しての設定だが、その『ヨハネの黙示録』を直接的に示してキリアンは、自らがまず聖書の読者でもあることも忘れずに示している。

Esprit Saint que de nuit au Pathmique rivage,
 Guindas sur l'espaisseur d'un prophete nuage
 L'Apostre aimé de Christ pour d'un Cæleste trait
 Graver dans son esprit les meurs, & le pourtrait
 De l'Antechrist futur, & qu'apres de sa plume,
 Il nous a fait cognoistre en un docte volume :
 Pour me rendre lecteur d'un si profond escrit,
 Au feu de tes saints rais espure mon esprit,
 Enleve moy d'icy, [...]²⁷⁾

La Dernière Semaine
 «cinquiesme jour», v.1-9

しかし先の引用にもあるように、夢から覚めた詩人が記憶を頼りにその映像を7日間という時間構造のもとに移し替え、意味を与えていくとき、詩人は明らかに「注釈者」の役割を担い、また読者に「教える者」ともなるのだ。

つまり、キリアンが自らの作品で利用するのは、靈感を受けた詩人と注釈者というイメージが交互に現れ、さらには自らが教える者にも教えられる者にもなる、という重層的な語り手の構造である。では、こうした様々な語り手を作品に導入する意図は何だったのか。そのことの理由にこそ、先に論じた「歴史」と「詩」の問題があるのではないか。

デュ・バルタスに対するデュ・ペロンの批判を見れば明らかのように、デュ・バルタスが詩的装飾とした部分をデュ・ペロンは詩ではなく歴史であると断じたのだった。これは一方では詩とその他のジャンルを明確に区別する考えであると同時に、その境界をどこに設定するのか、という問題が詩人によってまちまちであることを表してもいよう。キリアンの場合、「教育者」「注釈者」としての語り手が前面に出てしまった時、作品はむしろ、いわば「歴史」の方向に傾いてしまう。そのことを避けるために敢えてキリアンはこうした多層の語り手を設定し、他方では「靈感を受けた詩人」あるいは「教えを受ける者」として作品を「詩」としても読めるようにとしているのではないか。そして詩というものの在り処を、何より書物という場を介した語り手—しばしばそれは「私」という一人称をとるが—を通じて反省する点に、キリアンの、それまでの詩人とは一線を画す特徴がみられるのである。

(亜細亜大学講師)

27) *Ibid.*, p.112.